



◆ アイヌ文化のことをもっとも話したい!  
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で  
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。  
◆



今月のテーマ

**エカシイキリ(父系)とフチイキリ(母系)**  
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)



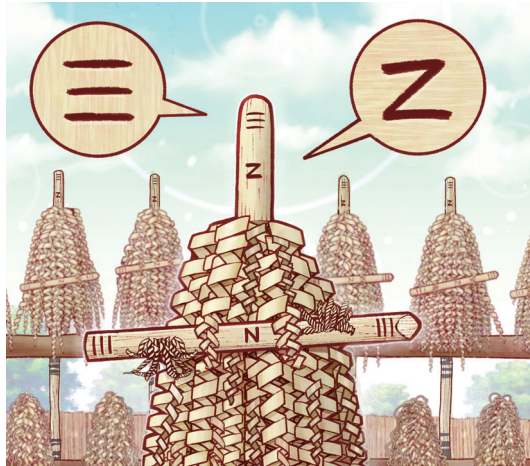
## ア

シリパアウクワ オンカミアンナ(新年を迎えて拝礼しましょう)新年おめでとく)

今回は家族に関わるお話、「エカシイキリ」と「フチイキリ」について紹介したいと思います。エカシ(祖父)、フチ(祖母)はこれまで何度も紹介してきましたが、それにイキリ(の集まり、の系統)がつくことで、父系(=男系)、母系(=女系)を表す言葉となります。

エカシイキリを代表するものには、イトクバやエカシイトクバ、イナウシロシなどと呼ばれる父から息子へと男性に継がれる刻印、相印(せいん)があります。重要なカムイ(神)を祀る際につくられるイナウ(木幣)や祈詞(いのちごと)をカムイに伝える役割を持つキケウシ(削りかけ付き捧酒箸)、イヨマンテ(クマの霊送り)でクマ神の土産にするペレアイ(花矢)など、アイヌの儀礼にまつわる神聖な祭具にイトクバは刻まれ、カムイに誰が祈っているかを知らせる役割もあるといえます。

フチイキリは、ウフソク(懐にある帯)やラウンクック(下にある帯)などと呼ばれる、肌に直接締める紐状の腰帯に代表されます。イラクサやツルウメモドキなど



イラスト/ 莊田悠人

の植物繊維で編まれ、帯端には小さな布房が付けられます。女性の守り帯として母から娘へ製法とともに伝えられ、系統により形状が異なるので、母と娘は同じですが嫁は違うウフソクを持ちます。嫁ぐ娘に母親が守り帯を着け「これは絶対人に見られてはならない、たとえ自分の夫であろうと、触ることはあっても、

見せることはできないものだよ」と教えたといえます。女性が亡くなると死装束とともにウフソクを着け、母相のもとに行くようにと、あの世での案内役でもあるといえます。姑が嫁の出産の世話をしたり、姑が死去しても嫁は直接的に関われないとされ、結婚や出産、葬儀など女性の通過儀礼の様々な場面でフチイキリに関わることはシネウフソ(同「母系」)実母、姉妹、母方の伯母や従妹等)がおこなうという決まりがあったといえます。

日高には、この世界を造った天神がイトクバとウフソクを与えたという話が伝えられています。エカシイキリ、フチイキリの機能は、生活の中で守らなければならないルールや慣習などと精神世界が大きく関わりあっていることですよね。



次回のテーマは  
「ハラキ/サロルンチカ(鶴の舞)」  
本田優子(札幌大学教授)が担当します。



**ウポポイ**

NATIONAL AINU MUSEUM and PARK  
民族共生象徴空間

北海道白老町にOPEN



ウポポイPRキャラクター  
「トゥレツボン」

- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 莊田悠人(しょうたゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。



「こんには」からはじめる。